

快晴のもと大和三山を巡る

2月25日(土)、健生会友の会山歩きクラブの例会で、畝傍山(標高199m)⇒香久山(152m)⇒耳成山(140m)の順で大和三山に登りました。畝傍山から香久山への途中で本薬師寺跡に立ち寄り、香久山から耳成山に行く途中で藤原宮跡を通りました。

この三つの山は、古くから人々に親しまれ、神話の舞台とされたり、詩歌の対象として数多く詠まれたりして来ました。

持統天皇の「春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香久山」(万葉集)の歌はあまりにも有名ですが、この歌は当時の藤原宮から香久山を眺めてのものでしょうか。



↑香久山から見た畝傍山

かつての日本の首都

藤原宮は、藤原京の中心に造営されましたが、それは三山の真ん中の位置でもあるのです

持統天皇は持統8年(694)、飛鳥浄御原宮から、この地に都を移し、中国の都・長安を模して本格的な都・藤原京を造ったのです。その大きさは近年の研究で東西5.3km、南北5.3kmの10里四方の規模だった(相原嘉之著「古代飛鳥の都市構造」)とされ、大和三山を含み、北の端は耳成山のさらに北にあったそうです。藤原京の当時の人口については、諸説がありますが、5万人位でしょうか。

藤原宮跡の草原に立つと、大和三山が、当時都に住む人々にとって、身近かなものであったと実感でき、古代日本の大都市とそこに生きた人々にも思いを馳せながら、歩き、登った半日でした。

ここでもナラ枯れが

残念だったのは、大和三山でもナラ枯れ被害が目立つことで、切り倒された大きな木々とビニールで密閉された切り株等を各所で見かけました。有効な対策が一日も早く実施されることを切望しつつ、こうしたこともされていない二上山の現状に不安を感じたことでした。

↑畝傍山でのナラ枯れ対策

藤原宮跡のヤドリギ

藤原宮跡には見事な大木が茂っていますが、その中の大きな落葉樹の梢近くに、ヤドリギの大きな塊がいくつも着いていました。(写真右) さらに道路を挟んで北側にある池の堤防のサクラにもヤドリギが寄





生しており、大きなヤドリギの塊をぶら下げた枝がいかにも重そうに垂れ下がっていました。(写真左)

取りつかれたエノキやサクラは冬枯れで葉を落とし尽しているのに、取りついたヤドリギが青々と茂っているのは、異様だが不思議な光景。昔の人がヤドリギに霊力を感じたのも分かるような気がします。

そして、他種の木から木へ、枝から枝へと繁殖していくのも、さらに見事な球形に密に成長していくのも、実に不思議な生態ですね。

ヤドリギはヤドリギ科ヤドリギ属、このほかヤドリギ科にはミズナラ、ハンノキ、クリなどに寄生するホザキヤドリギ、ツバキ、ヒサカキモチノキなどに寄生するヒノキバヤドリギ、アカマツ、モミ、ツガなどに寄生するマツグミがあります。

続・二上山に咲く花々 21(前回のニシキゴロモは20回でした)
ノギラン(芒蘭) キンコウカ科ソクシンラン属

(従来はユリ科ノギラン属)

写真 澤木 仁 さん

日当たりのよい遊歩道や登山道の崖地に生え、夏(6月～8月)葉の横から棒ブラシ状にたくさんの小さい花を咲かせます。

一つ一つの花は上を向き、パッチリと可愛いのですが、黄緑色を帯びるクリーム色なので、地味です。葉は地表面に放射状に広がるロゼット葉で、ショウジョウバカマとよく似ていて紛らわしいのですが、二上山ではショウジョウバカマは早春に咲き、ロゼット葉の中心から花茎を伸ばすので区別できます。



続・二上山に咲く花々 22
ソクシンラン(束心蘭)

キンコウカ科ソクシンラン属

(従来はユリ科ソクシンラン属)

写真は 澤木仁 さん

ランに似た葉の束の中心から花茎を伸ばすので、この名になりました。高さは30～50cmですが、葉も花茎も細くて小さく、そして花も小さいので、目立たなくて、登山道の路傍や足元に咲くのに、多くの人が気づかないまま通り過ぎます。花期は4月から6月。

花は壺状で白ですが、花の先端は6裂し淡紅色を帯びて可愛らしい。